

博士論文審査及び最終試験の結果

2006年06月21日

報告 今井昭夫

学位申請者 金成蘭

論文名 ベトナム戦争期のベトナム労働党による人民動員宣伝
－党機関紙『ニャンザン』掲載写真の宣伝メッセージ論的研究－

審査委員 今井昭夫 (主査 本学)
西谷修 (本学)
川口健一 (本学)
根本敬 (本学)
李 孝徳 (本学)

審査委員会は、申請者の論文指導教員である地域文化研究科教授今井昭夫（ベトナム地域研究）を主査に、副査として、フランス思想が専門で戦争論・メディア論に詳しい西谷修教授、ベトナム文学・文化研究の川口健一教授、ビルマ近現代史・東南アジア政治史研究の根本敬教授、比較文学・メディア研究が専門の李孝徳助教授の全5名で構成された。

結論

金成蘭氏から提出された博士學位請求論文「ベトナム戦争期のベトナム労働党による人民動員宣伝－党機関紙『ニャンザン』掲載写真の宣伝メッセージ論的研究－」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

論文の概要

本論文は、ベトナム戦争期（とりわけ1965年から1973年まで）にベトナム民主共和国（いわゆる北ベトナム）の政権党であったベトナム労働党（現在のベトナム共産党）が、社会主義建設やベトナム戦争を遂行していくために、人民に対してどのような宣伝を行なっていったのかを、ベトナム労働党機関紙『ニャンザン』の掲載写真の分析を通して明らかにしようとしたものである。これによってベトナム戦争当時の北ベトナム人民に実際に語りかけられていた、より具体的なベトナム社会主義像・ベトナム戦争像の一端を提示しようとしたものである。

論文は序論と本論の4章、および結論から構成されている。本論文は新聞掲載写真を主たる研究対象としているために、『ニャンザン』紙に掲載された数多くの写真がキャプションの日本語訳とともに論文中に挿入されているのが、大きな特徴である。

序論では、ベトナム戦争期、人民を戦争に動員し社会主義建設の当為性を説明する「宣伝」工作がベトナム労働党にとってより重要な位置を占めるようになったにもかかわらず、従来のベトナム（戦争）研究では殆ど扱われることがなかったこと、当時の北ベトナムにおいて党機関紙や写真という視覚メディアが宣伝手段として重要であったことなどが指摘され、本論文では党機関紙掲載写真で表現されたものを通じて、ベトナム戦争期のベトナム労働党の宣伝メッセージを読み解いていこうとする立場が明らかにされている。

第1章では、ベトナム戦争期の北ベトナムにおける言論状況について述べられ、ベトナムの最も代表的な新聞であるベトナム労働党機関紙『ニャンザン』が労働党の重要な対人民宣伝・教育の手段であったこと、党の意向を最も直接的に反映したものであったことが党文献の詳細な分析から明らかにされる。『ニャンザン』紙を党の宣伝機関として整備するために、党中央からの指導を強化する体制が整えられるとともに、党の幹部を直接新聞制作作業に投入しつつ、通信員・工作員の情報ネットワークが構築され、『ニャンザン』紙を介して、人民の意見を党指導部に伝えるシステムが整備されると同時に、さまざまな新聞普及工作が講じられることによって党・国家からの指示をより効果的に伝達する対人媒体システムが整備された可能性が考えられるとしている。また、ベトナム戦争期、とりわけアメリカとの戦争が本格化する1965年以降、『ニャンザン』紙に課された宣伝・教育任務は「革命的英雄主義」的「新しい人間」の鼓舞になるが、軍人・兵士と労働者、戦闘と生産の姿が多く描かれるようになったことを『ニャンザン』掲載写真の数量的分析からも実証している。体系的に『ニャンザン』紙の歴史、党からの位置づけ、発行体制、普及工作などが詳細に論じられたのは本論文が初めてだといえる。

第2章では、1965年から1973年までの時期の『ニャンザン』紙に掲載された写真の内容の変化を時系列的に追い、戦争中の大きな転換点となる出来事があった前後に、写真内容の変化がもたらされていることが確認されると同時に、それらの出来事が実際に人民に伝えられている時期はややズレをみせており、戦争の出来事に沿った従来の時期区分からは見えてこない、もう一つの戦争の時間の流れが宣伝上に存在していることが明らかにされている。金氏は、このようなズレは、情報追求及び問題解決者としての性向、恒常性、集団成員としての性向という人間の基本的性向を上手に利用した宣伝手法として考えられるとし、写真変化による宣伝面での「ベトナム戦争期」は1965年2月から1973年1月までと見ることができるとしている。

第3章では、北部での社会主義改造が基本的に完了し、北部での社会主義建設と南部での民族解放闘争が主要な任務とされたベトナム戦争期のベトナム労働党の社会主義宣伝と戦争宣伝の2つの主題別分析が扱われている。金氏は、1954年から1965年までの時期と1965年以降のベトナム戦争期では宣伝の比重が社会主義宣伝から戦争宣伝に転換したことを新聞掲載写真の質的な面・量的な面から裏づけ、また、「豊かさ」を強調する点は同様であるものの、社会主義宣伝の内容や提示の仕方が前の時期とは異なってきていることを明らかにしている。戦争宣伝については、敵を「他者化」する二分法的な考え方から正義の戦争であることが強調され、戦争への動員と戦勝の可能性を人民に納得させるような仕掛けがあったことを指摘している。俗に、ベトナム戦争は超大国アメリカと弱小国の北ベトナムとの戦争といわれるが、ベトナム人民にはもっぱら北ベトナム側の「勝利」とアメリカの「敗北」だけが見せられ、「強大な国」としてのベトナムがベトナム人民には見せ

られていたのである、とする。

第4章では、この時期の『ニャンザン』掲載写真に数多く使用されている女性・子供やホー・チ・ミンの表象の分析を通して、党・国家と人民の関係が家族関係をアナロジーとして「親密さ」という関係が強調されていたとする。

結論では、ベトナム戦争期の宣伝で注目すべき点の一つは、ベトナムの「敗北」の姿、外国からの援助状況、中国の文化大革命や中ソ対立、ニクソン米大統領の訪中などや、土地改革期などの情報が全く見せられていなかったことであるとし、「豊かさ」を見せようとした社会主義宣伝や戦争の正当性を示した戦争宣伝の存在とともに、「見せていない部分」があったことによって、もう一つの「現実」が作り出されたこと、それによって党に対する信頼を人民に持たせ、アメリカを「敵」として「他者化」することがより可能となったのではなかろうかとしている。

審査の概要及び評価

本論文の評価される点は以下の通りである。

今まで扱われてこなかったベトナム戦争期の北ベトナムの宣伝のあり方やベトナム戦争写真を扱ったケース・スタディーとして画期的・先駆的な意義があると高く評価することができる。1957年から1973年までのおよそ16年間の『ニャンザン』紙と1958年から1974年までのおよそ17年間の『学習』誌（労働党理論誌）の記事に目を通し、10年間近くにわたる『ニャンザン』掲載写真を丹念に精査し、分類し、その特徴を示した労作であり、これだけ継続的・体系的にこれらの資料を扱った研究は今までにみられないものである。本研究は、ベトナム現代史研究にとってのみならず、「戦争とメディア」研究にとっても、たいへん有意義な歴史資料の整理・蓄積となっているといえるであろう。またベトナム現代史研究において、新聞写真というメディア素材を扱い、従来の文献歴史学とは異なったアプローチを試みたユニークな意欲作であり、実証的文献研究だけでは見えてこなかった点をいくつか明らかにしたことは、この論文の功績である。たとえば、上述のように、戦争の出来事に沿った従来の時期区分からは見えてこない、もう一つの戦争の時間の流れが存在していることを明らかにしている点や、日本のベトナム研究でいわば定説化していたこともあった「貧しさを分かち合う社会主義」像に対し、これを根本的に覆すものではないが、宣伝研究の領域から異なる側面を明らかにしたこと、また創られた伝統として「愛国主義の伝統」の言説や歴史観が60年代に形成されたとする従来の「定説」に対しても、この時期の新聞紙上においては、「愛国主義の伝統」は殆ど語られていなかったことなど、新たな知見を提供してくれている。本論文と口述試験を通して、金氏の研究者としての資質は十分に確認された。従来、ベトナム戦争研究はほとんどが国際関係論の出身者によって担われてきたが、金氏が新風を吹き込むことが期待される。

本論文の不十分な点としては、アメリカのベトナム戦争報道と北ベトナム国内のプロパガンダの異質性についてもっと意識的であるべき点、メッセージ論の理論的枠組みが若干不十分である点、写真とキャプションを合わせて分析していくのが本論文の特徴であるが、キャプションに依拠して分類しがちで一部の写真の分析が一面的なところも見受けられる点などが審査員からは挙げられたが、審査委員会では本論文が全体としては博士の学位を授与するのにふさわしい水準に達しているとの結論を下した。